

- 多面的機能支払交付金の前身制度創設前から、混住化や高齢化により荒廃が進んでいた里山再生に向け、有志が中心となって農道の歩道部分を木材チップで被覆することにより景観形成に取り組み。こうして整備した農道は「鹿田山フットパス」として地域住民等も日常的に利用するように。
- この活動が母体となり、平成18年に鹿田山環境保全ネットワークを設立して前身制度に参加。渡良瀬特別支援学校も参画し、遊休農地を活用したサツマイモ、菜の花の栽培や鹿田山フットパスの保安全管理などを実施。平成29年度、大間々用水土地改良区が事務局を担う形で近隣2組織を含む「鹿田山広域協定」を設立するとともに、鹿田山環境保全ネットワークをNPO法人化。
- 連携した活動を通じ、鹿田山環境保全ネットワークを始めとする活動参加者と渡良瀬特別支援学校が相互に活力、成長、感謝など良い影響を与え合い、鹿田山地域の保全と未来に繋がっている。

【地区概要(R6年度時点)】

- ・取組面積 320.2ha
(田 73.4ha、畑 246.8ha)
- ・資源量 水路119km、農道162.6km
ため池5箇所
- ・主な構成員 水利組合、自治会、高校、特別支援学校、幼保園、土地改良区等
- ・交付金 約17.2百万円

(広) : 鹿田山広域協定事務局
(大間々用水土地改良区)
(学) : 渡良瀬特別支援学校

一 連携した活動を行うことによってどのような影響を感じていますか。

(広) 支援学校は保全活動の主力メンバーです。生徒たちが頑張っているのに遊んでいるわけにいかないと大人たちがみんな力を貰っているんですよ。

(学) 地域と密着して毎日のように活動できるので、地域から頼りにされているという意識を持つことができます。作業に行くと「ありがとう」や「ご苦労様」と声を掛けてもらえ、生徒たちもそれを楽しみにしていますし、誇りや自信、自己肯定感に繋がっていると思っています。

一 活気を保ちながら長期にわたり連携活動を続けられているのはなぜでしょうか。

(広) 私たちは支援学校を「核となる施設」と捉えているんです。実際、支援学校が多面的機能支払の活動を引っ張っていく核になっています。鹿田山は、農地だけでなく、里山があり核となる施設があるからいろんな人が興味を持って集まれる場所になっていると思っています。



【→】

わたらせ

渡良瀬特別支援学校

【←】

おおま

大間々用水土地改良区
(鹿田山広域協定事務局)

(右) 顧問 細野安高 氏
(左) 主任 堀田貴志 氏



(中) 校長 近藤千香子 氏
(右) 教頭 星 裕貴 氏
(左) 教員 齋藤和明 氏

一 今後の展望を教えてください。

(広) 将来的な目標として鹿田山環境保全ネットワークで福祉事業に取り組もうと考え、NPO法人化しました。卒業後の受け皿として例えば就労継続支援B型事業所を立ち上げ、今の活動をもう一步先に進めていける仕組みを作れないかと組織内で話をして準備を進めているんです。

生徒たちが参加できる作物体系を考え、収量や収益にはこだわらなくたっていいかなというのが私のイメージです。

(学) 卒業後も同じ鹿田山でこれまでの経験を活かせるという就労までの一貫したモデルができれば、とても魅力的で良い話だと思います。実際に就労しなくても、生徒が初めて就業体験をする場にもなり得ると思います。

やはり課題は就労先で、合う合わないがあり、環境が変わると人に対する態度や思いやりの心がガラッと変わってしまうことがあります。鹿田山では生徒たちがゆったりと生活できており、環境を変えずにこの流れの中で卒業させてあげたいなという思いがあります。

実現するのはすごく大変ですが、同時に、これまで生徒たちと共に活動に携わってきて可能だろうとも思います。

(学) 学校としても、ユネスコスクールとしてより主体的にどのような活動ができるのか考えていきたいと思っています。

連携のきっかけ（活動開始当時）

- ・当時の大間々用水土地改良区副理事長や有志が中心となって実施していた荒廃が進む地域の再生に向けた活動が母体となり、平成18年に鹿田山環境保全ネットワークを設立し、前身制度の試験的事業に参加。
- ・当時の同改良区職員の家族が渡良瀬特別支援学校に在学しており、遊休農地での菜種播きイベントへの参加を呼び掛けたことで連携が開始。

Step 1（活動開始当時）

活動内容の調整

- ・大間々用水土地改良区が調整役となり渡良瀬特別支援学校と活動内容を検討し、遊休農地を活用した菜種播きイベント及びサツマイモ栽培、鹿田山フットパスの保全管理の活動を開始。

Step 2（H29～H30）

広域化・NPO法人化

- ・大間々用水土地改良区が事務受託等を通じて携わってきた近隣2組織を含む鹿田山広域協定を設立。同改良区が事務局に。
- ・福祉事業を構想し、鹿田山環境保全ネットワークをNPO法人化。

Step 3（R7）

ユネスコスクールに承認

- ・これまで鹿田山環境保全ネットワークと共に取り組んできた活動がSDGsと親和性が高いことから、渡良瀬特別支援学校がユネスコスクールとして承認。

渡良瀬特別支援学校の概要

- ・昭和54年度に群馬県立渡良瀬養護学校として開校され、平成27年度から群馬県立渡良瀬特別支援学校に名称変更。
- ・「児童生徒一人一人の能力や個性を尊重し、明るくたくましく生きる人間を育成する」ことを教育目標に掲げ、知的障害を有する児童・生徒たちに対し、通学又は訪問により日常生活、教科学習、作業学習など各児童・生徒の興味や能力に合わせた教育を提供。
- ・令和7年4月にユネスコスクールとして承認（※）。

（※）ユネスコの理念を学校現場で実践するため、1953年に発足した国際的ネットワークであるASPnet（Associated Schools Network）が加盟を承認。日本では、ASPnetへの加盟が承認された学校を「ユネスコスクール」と呼称し、全国1,083校が該当（2025年9月時点）。



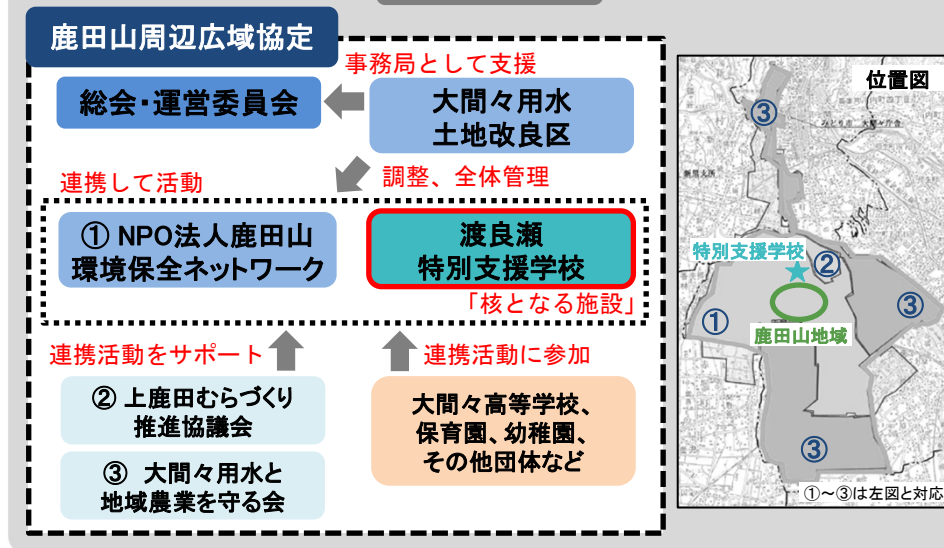
【生徒たちが取り組みやすい活動のポイント】

- ・手順が決まっている作業
- ・視覚的に成果が分かりやすい作業
- ・もっとこうしたい等の意欲を引き出せてステップアップに繋がれる作業



サツマイモの苗植えは、穴掘り、苗植え、全体確認等で作業を分担し、障害が重い生徒から軽い生徒まで全員で行うことができる。

体制図



Step 4（近年）

現在の活動

- ・これまでの活動に加え、綿花の栽培も開始。
- ・菜種播きイベントは学校全体（約260名）で実施。このほか近隣の保育園や幼稚園5園、地域住民や団体等の580名超が参加。
- ・サツマイモ栽培は、大間々高等学校との交流機会も設けながら高等部全体（約120名）で実施。畝作りは環境保全班を中心に実施し、苗植えや収穫は保育園や幼稚園、地域住民や団体等も参加。
- ・鹿田山フットパスのチップ敷きは高等部全体及びその保護者、地域住民や団体等が参加して実施。実施後には上鹿田むらづくり推進協議会のサポートにより昼食会を開催して交流を深化。
- ・これらのほか、高等部で班別に行う「作業学習」の課程で環境保全班全13名が草むしり、トイレ清掃、チップ敷きの3グループに分かれて年間を通じてほぼ毎日鹿田山フットパスを維持管理。

大間々用水土地改良区が事務局として日程調整や資材準備等を実施

【主な交付金の使途】

- ・農作業場となる遊休農地の借上げ
- ・チップ材、苗、飲み物 等



鹿田山フットパスは、イベント的なチップ敷きに加えて環境保全班が日常的に管理することで良好な景観を維持。利用者も拡大。

今後の展望

- ・引き続き連携した活動を行うとともに、渡良瀬特別支援学校として小・中学部の活動の拡大やユネスコスクールとしての更なる活動の展開をより能動的に模索していく。
- ・卒業後も鹿田山地域で活躍できる場として就労継続支援B型事業所等の開所を構想している。